

放送文化、永遠なれ

沖縄で戦後初のラジオ局アナウンサーとなり、その後も琉球放送の常務取締役、沖縄放送協会（NHK沖縄放送局の前身）の会長、その後NHKの経営主幹を歴任するなど放送界に長く貢献された川平朝清さんは御年96歳。放送文化基金では事務局長と監事を務め、設立された当初をよく知る数少ないおひとりです。川平朝清さんに当時を振り返り、これからの放送についてお話を伺いました。

私は1983年に放送文化基金の事務局長に就任しました。そのころは放送関係の財団法人というのではなく、とても画期的な団体だったと思います。

放送文化基金は1974年に設立されました。当時のNHK会長、前田義徳氏は非常に視野の広い方で、内幸町にあった東京放送会館が当時の土地急騰ブームを背景に高く売れたことをきっかけに、売却金の一部を広く放送界のために使えないかと構想し、設立したのが放送文化基金でした。前田氏は当時NHKの監査委員だった中山伊知郎氏と鈴木竹雄氏に相談し、そのお二人がこのお金で放送界のために基金を作ったかどうかと進言されたと聞いています。そのアドバイスを受けて前田氏はお二人に学識経験者の方々を集めて基金を作るための委員会の設立を依頼したそうです。このとき、NHKは、事務局は担当するが委員会には参加は致しませんという方針だったそうです。当初からNHKが介入したり、子会社化するという意図は全くない状態で、財団を作り上げたというのは非常によかったと思いますね。

事務局での思い出

印象深いのは、放送文化基金設立10周年の時にテレビドキュメンタリー番組の企画選奨という記念事業を立ち上げたことです。これは本来ならば制作された番組に対して賞をさしあげるというのが普通ですが、これから番組を作るための企画に対してお金を払おうという初期投資的なことを始めました。設立20周年の時にはテレビ番組の企画選奨として日本だけではなくアジア全域を対象を拡大し、その年に受賞した3件中2件は海外の放送局の企画でした。こういう賞というのは他になかったと思います

ね。こういう萌芽的な企画を行うというのが放送文化基金の良いところだったんじゃないでしょうか。

事業を行うにあたり、頭を悩ませたのが財政です。最初1975年は利息の収入が10億7900万円ありました。しかし、1983年には9億7600万円に減り、1992年には7億1900万円になりました。助成事業では当初8億円助成していたのも20年近くで2億8300万円まで減りました。この状況を目の当たりにして私は今後かなり運営上工夫しなければいけないと思いました。この状況を当時放送文化基金の評議員をされていた前田義徳氏に相談すると意外な答えが返ってきました。「金利のことをあんまり気にしないでいい。120億円の基金をどんどん使っていって、これが最後の助成ですって言って終わってもいいじゃないか。」と。今の助成額は6000万円。私がいたころよりもさらに金利も下がり助成できる額も少なくなってしまったけれども、それでも助成を続けていることは素晴らしいと思います。これまでの助成額が基本財産の120億円を超えているというのは広く放送文化に貢献できた証拠で当初の目的を達成できているのではないのでしょうか。

これからの放送に願うこと

一方で、私たちの時代から残っている課題もあります。それは日本がまだまだ世界に向けた情報の発信力が弱いということです。私が放送文化基金に在籍していた当時から、国内の放送だけでなく国際的に番組を売り出す意識をもって番組制作をできないかと関係各所に話をしてきました。BBCは当時、すでに番組を作るときにマーケティングまで考えて作っていました。だから番組が放送さ

れた時点で、すでにあらゆる言語で放送できるような状況になっていました。日本はその状況にまだ追いついていないようです。日本にも良い番組がたくさんあるのに惜しいことだと思います。

私は放送メディアがなくなることはないと思っています。息子のジョンからは「もう放送は忘れなさい。いつまでも小型のポータブルラジオを持って聞く時代じゃない。今、人々の情報源はこのスマホの中に全て入っているんだよ。」と言われます。しかし、私はジョンに「Wi-Fiのないところでこれ役に立つ？」と返すんです。ネットにも弱みがあるし、ネットだけに依存するのはダメだと思うのです。このWi-Fiというのもどこにでもあると思っただけじゃありません。やっぱり一番は電波だと思うのです。私が戦後、沖縄でラジオを始めたときに、アメリカ占領軍は発電機と受信機から送信機までを全部一つのヴァンに載せた、いわゆる移動ラジオ局みたいなものを持っていました。大きな施設じゃなくても、コンパクトな電波に乗せることができる。これは原点じゃないかと私は言っているんですが、アクセスする上で最も簡便なものであると思うんです。災害があったときにはこういうものが絶対必要になる。だから、絶対にこの電波メディアというのはなくならないし、なくしてはいけないんじゃないかと。もちろんテレビの形態というのは変わっていくと思うし、送る側の考え方や制作の在り方は考えなければいけません。私は放送メディアにはまだまだ期待をしています。ですから「放送文化、永遠なれ」という気持ちが私にはあります。



川平 朝清 (かびら ちょうせい)

元アナウンサー。1927年生まれ。琉球放送、沖縄放送協会を経て日本放送協会（NHK）入局。放送文化基金では事務局長、監事を歴任（1983年～1994年）。息子にラジオパーソナリティーのジョン・カビラ氏と俳優の川平慈英氏がいる。